

<随想>論語読みの論語知らず

著者	成清 良孝
雑誌名	日本文学誌要
巻	62
ページ	98-101
発行年	2000-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020128

論語読みの論語知らず

成 清 良 孝

わたしは一九九一年三月、都立新宿高校の教員を大過小過を繰り返しながらも、なんとか停年まで勤めて退職した。これは、まだ現職だった頃の話である。

国語科教員七人のうち、漢文プロパーが二人いたが、時間割の組み方いかんによつては、現代文も古文も漢文も担当しなければならなかった。

二年生のあるクラスで漢文を受け持ち、論語を扱っていた時である。里仁第四に、

子曰、君子欲訥於言、而敏於行。

という章句がある。男の子の一人から、「それ、むつとり助平すけへいのことですか」

と、唐突な質問を受けて、わたしは一瞬啞然あぜとしたが、男の子たちはやんやの喝采かつさいで、教室の中は一時騒然となった。

訓詁註釈をこととし、退屈な授業に終始しがちな時間に、少々

品格に欠けるが、突拍子もないことを言い出して、教室の雰囲気
気を活性化？させるおもしろい子が、その頃は結構いた。

もちろん「君子欲訥於言、而敏於行」は、リップ・サービス
ばかりで実行を伴わない人間を批判した章句であるが、これを
いかにも陰気臭いむつとり助平のイメージでとらえるなんて、
なかなかユニークだと思った。

男の子から奇妙な変化球を投げられた授業が終わり、冷汗三
斗の思いで国語研究室へ戻ったわたしは、その時はからずも若
い頃小耳にはさんだ「NATO軍の男の子」というスラングを思
い浮かべたのだった。

NATOは一九四九年に設立された対共産圏諸国を念頭にお
いた西欧諸国の安全保障条約機構のことで、ブリュッセルに本
部がある。

「NATO軍の男の子」とは、No Action Talk Onlyの意味
にもじったものだ。若い男女がデートしていて、女の子は早く
唇を奪うなり、乱暴に抱きしめるなりしてもらいたいのに、い
つまでたつても手ひとつ握らず、観念的なおしゃべりばかりし
ている男の子をからかっているのである。

この「NATO軍の男の子」と「君子欲訥於言、而敏於行」と
は、わたしの脳裡では、ものの見事ついでに對の語句として符合する。
わたしは中学生（旧制）の頃から、論語のいくつかの章句が、
現代人の生きざまや価値観に少しもフィットしない点を、自分
なりに受けとめてきた。一九五二年「世界」六月号に載った桑
原武夫の「漢文必修など」を、それこそ目くるめくような感
動で読み味わったことも忘れてはいない。

わたしがこんなことを書くのは、わたしの郷里福岡県柳川で、孔子祭なるものが復活した（一九九九年十二月）という便りを、中学の同期生から受け取ったからである。

江戸時代の初め、柳川藩の藩儒だった安東省菴（あんどうせいあん）（一六二二—一七〇一）は、明から亡命してきた朱舜水（一六〇〇—一六八三）の学徳に心酔し、困窮していた師におのれの禄の半分を頒（わ）つた。

朱舜水は感謝のしるしに、持参していた青銅の孔子像三体を省菴にプレゼントした。その一つが藩学の流れを汲む県立伝習館高等学校に継承されていて、昭和十九年までは、それを前に孔子祭が行われていた。

今度、孔子祭が復活したのは、安東省菴没後三〇〇年にちなみ、彼の学問と思想を顕彰するのも目的の一つであると聞いた。江戸時代初期の安東省菴は人格高潔で、学問的にも関西の巨儒と言われたが、彼の業績の今日的意味となると、はたしてどうだろうか。

わたしの手もとに、柳川・山門・三池教育会が出した『柳川人から見た安東省菴とその著三忠伝』楠本正成公伝 世子正行公附よみ下し文』なる冊子がある。

三忠には、ほかに平重盛、藤原藤房が採りあげられている、という。この解説を書いた郷土史家の渡辺春三氏は、

「徳川光圀の『大日本史』が世に出る前に、楠公の純忠を言つたものは、未だ無い頃であった」

と、たいへんな持ち上げようだが、思わず戦前の国史教科書の記述かと錯覚したほどだ。それがなんと一九七七年（昭和五

十二年）に書かれたものだから、開いた口がふさがらなかった。わたしは今、『梅松論』を時々拾い読みしている。これは一三五二年以降の成立と見られている。室町幕府がスタートしてから十五年たった頃である。北畠親房の『神皇正統記』や『太平記』（小島法師の作とされるが未詳）の対極にあつて、足利尊氏が政権を掌握する正当性を、事実にもとづいて書きとめたものと言つていい。

したがって、皇国史観、尊氏逆賊論のアンチ・テーゼで、太平洋戦争が終結するまでは、その研究も大きな制約を受けた。現在は神皇正統記や太平記より、その歴史資料としては、ずつと信憑性（しんぴやうせい）が高いと言われている。

ちなみに省菴が三忠の一人として顕彰した万里小路（までのこうぢ）こと藤原藤房（一二九五—一三八〇）は、後醍醐天皇の建武の政権成立後、その論功行賞の不公平を天皇に強く諫言（かんげん）したが聞いてもらえず、つむじをまげて京都北山に隠れてしまった。度重なる天皇の呼び出しにも応じず、ついには出奔した。これが省菴の言う「三忠」の一人か。もっとも藤房は進退（しんたい）を賭（と）して天皇に諫言したともとれる。

建武の新政が失敗し、足利尊氏が勝利を収めたのには、ちゃんとした根拠があり、それを戦前のように偏ったイデオログで、情緒たつぷりにねじまげようとする風潮が、戦後半世紀以上たった今日でも、日本人の精神風土の中に根強く残っている。同じ九州の儒者でも、省菴より百五十年ぐらい後れて生まれた日田の広瀬淡窓（一七八三—一八五六）は漢詩人としてもよく知られており、その作品は現在も漢文の教科書に出ている。

そして何よりも高野長英、大村益次郎、長三洲ら幕末の志士たちを育てた功績は大きい。

こんど五十五年ぶりに孔子祭を復活させる趣意書の一節に「世相混迷の中にあつて失はれつつある多くの徳目を今一度学ぶべきであるとの思いに駆られ……」とあつた。

「世相混迷」は「世相昏迷」の用語が適切だと思うが、わたしには昏迷しているのは、孔子祭を復活させた人たちの頭のほうではないか、と思つた。

その理由を一つだけあげると、泰伯第八にある、

子曰、民可使由之、不可使知之。

いくつか解釈にばらつきはあるが、「民衆は権力者の方針に従わせるだけでいい、その理由を説明する必要はない」と受けとるのが妥当なところであろう。最近、石原東京都知事が、この章句をよく口にするので、一般に知られるようになったが、戦後、この章句は儒教批判の最大のターゲットにされた。特に昨今の情報公開の怒濤のようなうねりの中では、はつきり悪徳の思想と断じていい。

もちろん『論語』の中には、現代人の生き方の参考になる章句もあるが、桑原武夫も言うように、この程度の知恵では複雑な現代を生き抜けまい。それより、ろくすつば読みもしないで、何千年も読み継がれたのだからと、ひたすらありがたがる事大主義の俗物どもには義憤さえおぼえる。

『論語』から現代人が学べる章句を一つだけあげよ、と言わ

れば、「衛霊公第十五」にある、

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎、

子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人。

であろう。「恕」は「思いやり」と解釈されている。「恕」は孔子の思想を貫く根本的な理念だと思うが、この章句を完全に咀嚼して、おのれの日常の実践倫理として、身につけられる若い人が、はたして何人いるだろうか。いや、若い人はいい。すでに馬齢ばかり重ねた冷酷非情な六十代、七十代の老醜どもが、ごまんといる。

わたしは月に一度、神楽坂の料理屋で、一龍齋貞鳳宗匠主宰の句会に出ている。俳句の勉強よりも、句評のあいまの貞鳳さんの艶笑小咄しや、句会のあとの懷石料理が楽しみな不埒人間だが、その貞鳳さんから、先日、こんな話を聞いた。

神楽坂の料理屋と同じチェーン店で開かれている銀座句会で、出席者の一人、海苔製造会社の社長が、散会直後に急病で倒れた。社長は七十歳の小太りで、無類の酒好きときている。何か循環器系の持病でもあったのだろうか。

救急車を待つ間、倒れた社長の側にいて見守っていたのは、その店の支配人と貞鳳さんの二人だけだった。当日出席者は十五、六人いたが、嫌悪？の表情で一瞥を与えると、そそくさと帰ってしまった。

「別に見守っていたからと言って、素人には何もできはしない。しかし、社長は十二月には必ず今年の一番海苔ですと言って、

句会出席者のみんなに、二帖か三帖ずつ配っていた。海苔をもらうからどうのこうのと言う以前に、同じ句会の仲間ではないですか。せめて救急車が到着するまでぐらいい見守るのが人情というものでしょう」

と貞鳳さんはしきりに憤慨していた。

海苔会社の社長は、時々神楽坂の句会にも顔を出す。わたしも何回か一番海苔の恩恵に浴したことがある。いつぞやは座敷に炭火のこんろを持ち込み、焼き海苔のおいしい作り方を実演してみせたことがある。

さいわい社長は二週間ほど入院しただけで、元気になったという。

人情紙のごとき銀座句会の老醜どもに、論語の章句を与えても、おそらく猫に小判であろう。こういう老醜どもに限って、若い人たちに尊大ぶって、わけ知り顔に訓戒をたれたがる。

孔子祭を復活させた人たちは、どうせ若い人たちの言動や発想にはついていけないだろうから、銀座句会に出ていた醜い老人たちに代表される人たちだけでも、せめて何とか始末する手だてを考えたらどうか。きみたちのフレキシビリティを喪失した発想や価値観では、若い人たちには、歯が立たないにきまっている。

と言うのは、先日も七十歳を越えたとおぼしい老人が、若者の茶髪について、

「あれは実に不愉快ですね。何で茶髪にするんですかね」

と若者のある現象をとらえて、少々感情的に批判したところ、その場に居合わせた若者が（その子は茶髪ではなかったが）

「年寄りの白髪染めと、若者の茶髪と、どこが違うのか、納得のいくよう論理的に説明して下さい」

と言われて、答えに窮してしどろもどろの醜態を演じた。

わたしはベスト・セラーの書籍というと、途端に購読欲をなくしてしまうひねくれ者だが、今度S予備学校から依頼された仕事で、否応なく乙武洋匡『五体不満足』や『アルジャーノンに花束を』、香山リカ『へじぶん』を愛するということ』などを讀んだ。

特に『五体不満足』は深い感銘を受けた。四百六十万部以上も売れたという。未来に希望が持てた。他人に対する思いやりややさしさ、常に明るくプラス思考で対処していく乙武さんの生きざまが、説得力に満ちて具体的に述べられている。

『論語』を中国古代思想の一つとして、クールに研究対象にする学問は当然レーゾン・デートルがあるわけだが、そうではなくて、多様な目的意識を持った高校生に、悪徳の思想が混在する論語を莫大な時間とエネルギーを傾注させて読ませる意味がはたしてあるのだろうか。それより『五体不満足』の方が、どれだけ若い世代の魂を揺さぶるか、はかり知れないものがある。それもせいぜい四、五時間あれば読み終える。

（なりきよ よしたか・一九五六年卒）